

有島武郎の文学（覚え書 I）

愛己に徹し、愛己に殉じて命を絶った小説家、有島武郎は、父武、母幸の長男として明治十一年三月四日生まれた。『私の父と母』によると、父は当時としては新しい教育を受けた方であるが、〈朱子学派の儒学〉が根柢をなし終生その影響からは脱することが出来なかつたとし、ものを鑑賞する場合独特な鋭い批評眼をもつていたが父は私達が芸術に携はる事は極端に嫌つて、殊に軽文学は極端に排斥した。私達は父の目を掠めてそれを味はなければならなかつたのを記憶する〉としている。父の教養からすれば漢詩文以外は軽文学とみて蔑む心があり、その眼と知識を育んだ時代環境から無理からぬことでもあった。一方、〈母の気性には潤達な方面と共に、人を呑んでかゝるやうな鋭い所がある。人の妻となつてからは、当時の女庭訓的な思想の爲めに、在来の家庭的な、所謂ハウスワイフと云ふやうな型に入らうと努め、又入りおほせた〉とし、〈母の芸術上の趣味は、自分でも短歌を作る位の事はする程で、可

也豊かに有つて居る。今でも時々やつて居るが、若い時には殊に好んで腰折れを詠んで自ら娛んでゐた。〉〈私共兄弟が揃つてかういふ方面に向つた事を考へると、母が文芸に一つの好愛心を有つてゐた事が影響してゐるだらうと思ふ〉とみている。小説を書くようになったのは母の血を受けたことによるというわけであらう。その母からは学校から戻ると〈論語とか孝経〉を読ませられ、よく母から鋭く叱られ、めそめそ泣いたこともあったと述べている。厳しい儒教倫理による躰の中で、母から受け継ぐ芸術への好愛心を徐々に燃やしていったことが窺われる。『自己を描出したに他ならない「カインの末裔」の文中に、

私は学習院の寄宿舎に入った頃から密かに文学書を耽読した。元来文学の方面に行き度い希望ではあつたが、家が喧しかつたし、自分の才能を疑つてゐたので、十二歳の時から小さいながら農業に入らうと決心した。中学を卒業して、札幌農学校に入った

菊地 弘

が、そこでも農業の事よりは、寧ろ文学、殊に英文学に親しんだ。農学校を卒業してから外国に行つた。外国では周囲の羈絆から遁れて、主に文学を読む事に日を送つた。日本に帰つて来ると、丁度「白樺」が創刊されたので、私もその同人となり、初めて作品を世に問ふ機会を得た。そして大正六年七月「新小説」に送つた「カインの末裔」などが縁となつて、文壇の一般的な注意を引くに至つた。

と述べたあとにへしかし、私の処女作は、本当をいふと「カインの末裔」ではなくて、世の中に発表したものでは「かんく虫」である。と自ら証言している。いうところの処女作『かんかん虫』（この作については拙稿「有島武郎覚え書(二)」(『文学年誌』)で触れておいた)は明治四十三年十月「白樺」に発表された小説で下層労働者の愛欲とその愛欲を奪つた男(支配者側)への復讐を主題にしている。既にいわれているように評論『二つの道』(五月)と『もう一度「二つの道」に就て』(八月)はこの頃の有島の思想的、文学的立場を知得するうえで重要なものである。既にキリスト教の善悪の価値観に批判的になつていた有島の内心から書かれたと思うその評論について、まず筋を辿つてみよう。二つの道がある。その道は松葉つなぎのように入れ違つて、だんだんとその間隔をひろげて墓場まで続いてゆく。人間は、心のままにその道を辿るが、どちらを行つても平然とは出来ない。迷いながら、それを辿るのである。人間は相対界に彷徨する動物であり、絶対というものはあり得ない。だから、二つの道を一つにすることは出来ない。中庸などと

いうことも、群集の平和のために考え出された虚偽であり、迷信である。この二つの道を、アポロとディオニソス、ヘレニズムとヘブライニズム、hard-heatedとtender-heated、霊と肉、趣味と主義、理想と現実、空と色などといろいろに言つた人がいるが、その道の意味はこれらの語では尽されない。しかし人間の思考や行為に際して現れる明確な現象で、無視できない。深刻な残酷な実在である。この二つの道のいづれか一つに徹底した人はいるが、そしてそれらの人の姿は、人々を感動させ、励ますが、その人はもはや人間ではない。ハムレットは、このディレンマの上に立つて迷いぬいた人間であり、これを捕えたシェークスピアは人の心の裏表を見知つた詩人である。がハムレットは二つの道に対して迷いぬいたが、テムペラメントが動いていない。この点でヘダ・ガブラーは興味がある。

ハムレットであるのはいいが、ヘダになるのはいやだ。しかし、人としての最上の到達はヘダの外にはない。ということ、矛盾対立の苦闘の中から近代人としての個の独立を樹立しようとするものであった。『もう一度「二つの道」に就て』では、人間は相対的能力しか持たぬものであるから、人生という複雑な問題を論理で割り切ること——絶対的事実や観念を捕える——ことは出来ない、『二つの道』で明言したことを更に詳述している。相対的に迷うのが人間であるという観点から、信仰は全く個人的なものであつて、主観的にのみ価値を有するものであり、絶対事相をつかみ得るとはいえないと断言し、独自の個性をもって生きる人間が、ある信仰の個条で縛られるのは理性的に堪えられないという。そのようなところに到つ

たのは入信以後自然な意力の抑制を強いられて苦悶したこと、又信仰者の偽善を見て信仰への不信を持ったことなど、それまでの、人間性を抑圧された体験が悲痛を極めた形で作動したものとと思う。矛盾を含んだ人間が、自己を確立したあと、どうするかということになると、ヘダ・ガブラーが想念に登場して来ているのである。つまりそれは、ヘダは自己の内部の矛盾は当然のこととして悲嘆しない。そして自分を破砕しようとする外部の圧力に対して、身を殺してまで戦い抜く。そのようなヘダになることは我々には苦痛だが、我々の心の奥には、ヘダとなる要求が感じられるのであるという、対立矛盾する二元の認識の中でやむを得ず身をヘダに扮するということで個の主体的独立をマニフェストしたものであった。

こう見てくると有島武郎は、いかに自己を生きるかという文学的命題をかかげた作家といえる。「いかに生きるか」の命題はわが国の浪漫主義や自然主義の作家の場合と近似している。有島は「自己」なり「個」なりを生かすためにヘダとなる内的要求があるのだとするアレゴリイに浪漫的気風を漂わせている。日本の自然主義文学が個の解放と独立を主張した浪漫性を要素的に多く持ち越しているものであったことは、既に多くの評者から指摘されていることである。有島の生きようとする心情はそうした主潮の近くにあった。

その「近い」と思われることは、例えば『観想録』の中で朝日新聞連載の藤村の『春』を読んで、〈青木が自殺しやうとしてゐる。自分には、読むに堪へぬ程切実に、その心持がわかつた〉（明治四一・五・五）と同情を寄せることにもなるのではないかと思う。有島

の内観思想は、いかに生きるかの存在苦に悩んだ透谷や藤村に近い苦悶を、日常的生の中で噛みしめていたからである。しかし「近い」ということは全く同類ということではない。「かかん虫」、「カインの末裔」、「或る女」などに描かれた社会的制約や習俗的見方に対する叛逆は浪漫的心情によるが、そこでの有島の小説方法は、生活の場で矛盾と昏迷にあえぎ、苦悶しつづける人間を描いたままなのである。苦悩や虚無を忘却させるための想念や耽美に個を解放する策を立てたりはしていない。つまり主観的に脚色をほどきないありのままなのである。ということは、浪漫的な心情に動かされながらも根柢には現実の真相を見るリアリズムの精神が横たわっているのである。となれば、浪漫主義や自然主義とは似て非なるものがあることになる。と同時に白樺派の武者小路実篤の理想主義とも一味違ったものであるし、志賀直哉のような古典的動きをもった個我主義とも同調出来ない。つまりすべては相対的認識に立つて存在苦に生きるのが人間であるとする現実的観念と自覚に由来するものであった。そのような相対的関連の中で認識してゆく姿勢は、「白樺」グループより一代若い作家である芥川龍之介が存在苦の緊張関係の中から痛切なりアリテイに根づいて創作に賭けたのと距離は近い。勿論、どのように表現するかに腐心した芥川の文体が捉える精神の軌跡と、いかに生きるかに賭ける有島の文体が示す精神の軌跡とは同じ秤に載せて斫断することは躊躇せざるを得ない。態度と方法からして、有島のより倫理的な苦悩に較べて芥川はより表現世界に苦悩していた。が、有島も芥川も現実苦を切り捨て

ず、現実苦に即して近代の人間観を求めたいというイデアに出発していたことはひとしい。自然主義とその末裔の私小説の否定から文学的出発をした芥川と、既に述べたが自然主義が抱え込んだものと近い質をもった有島とが共に当代文学界の中で異彩を放ったことは、狭く「私」に拘泥しなかったからである。

時期は少し下るが、芥川龍之介は『大正八年度の文芸界』の中で「又ぞろ一団の新進作家が、文壇へ新気運」をもたらすようになったとして有島武郎をはじめ里見、葛西、菊池、久米をあげてきている。彼等は自然主義以来の日本文壇に君臨した真、善、美の三つの理想を調和しようとしているといひ、取材の多方面な事、技巧の變化に富んでいることを特色として、文壇を支配するようになった最も新しい勢力であるとしている。醒めた眼により、芥川は自然主義や「白樺」派の創作感覚と異なる芸術感覚から成る有島文学を評価しているのである。

とにかく有島に立ち戻れば二元の世界からヘダの如く生きようとする意志力を現実社会の中で着実に伸長させようとすることは、やがてホイットマンの自己尊重の思想受容を経て独特の論理（愛己主義）を編み出さずにはおかないことになってくるのである。

で、いま少し有島の内部に踏み込んでみると、明治四十三年前後は心理的に不安動揺していたようだ。有島自身の魂の遍歴を如実に写している『リビングストーン伝』の序によると、アメリカ留学三ヶ年の間に弁護士で社会主義者のペアボディを介してホイットマンを知り、それまでの通俗的な物の見方から解放されたといひ、又

同じく社会主義者の金子喜一からはその方面の知識と情熱を学んだともいふ。その他にトルストイ、イブセンを愛読し、帰途、ロンドンでクロポトキンに会い、存分の糧を得てきたという。有島は、特に外在的なものに動かされ四分五裂していた自己を、就中へ神の信仰の中に見出し得なかつた本当の自分の姿」をトルストイの芸術に触れて考え、人間の生きる態度を会得したという。幼時から厳格に躰けられた儒教的リゴリズムに農学校時代に受洗したキリストの精神とが複合的に絡みあっていた。その有島が自由人のホイットマンの詩やトルストイの芸術論、社会主義などに触発され、特に人間の生活態度を芸術の力によって知得している。——「本から現実へ」眼を向けていった芥川を思い浮べるが——そこから自己を自由で社会主義的な意識で日本の現実に対峙するように仕向けていったということは想像に難くない。その意識と態度は偽善を憎んだ誠実さと融和して有島をして益々直心で純情に、感情を昂めさせたものと思ふ。

ところでまた直心と純情とは自由で自然な意志の飛躍と連動している。その「自然」の意志の尊重は自己愛を根本義としてローファー（自由人）として生きたホイットマンを吸収したことからできている。先きまわりしているが、後年『ホキットマン詩集(2)』（叢文閣、大正二・二・二三）の巻末に「ローファーとは怠けもの」とだ。約束の出来ない人間、誓ふことをしない人間だ。主義と節度とを所望しない人間だ。彼れは働か甲斐のある人々から歯痒ゆがられる。彼れは自分の欲することしかしない。外から強いられること

を極端に厭ふ。彼れは国家の建設に与らない。けれどもフアナテイックの外には誰れもが彼れを憎み得ないだろう。而して彼れは何事もなさなかつたか。人類の生活が始つて以来、人貌を有する他の動物としてののみ存続したか。或はさうかも知れない。さうならば自然は殊の外寛大だ。と有島なりの解釈を記しているが、絶えず反抗して倦むことのない「自然」の意志に有島が憧れていることが窺えよう。この「自然」を基調とした自己は、制約や桎梏から解放され、絶対的な自由を掌中に収めるといふところにまで成長するものであるが、一方有島の内部で規範のない衝動的で野性的な力と連動する生の型ともなつていた。つまりそれは自由で「自然」の醇化された衝動をもって偽善への反抗に徹する自己となるものであるととも、この反抗へ駆りたてる「自然」の意力は一面では内心に燃えたとぎってくる本能的な衝動（性欲）の形となつて現われた。その二重構造の様相の一端は『かんかん虫』や『カインの末裔』、『或る女』の主人公などに描かれている。そのことは又『リビングストーン伝』の序に、へ自分の性慾と信仰の間に始終苦しんだこと、信仰者でありながらへ心の中では常に婦人を犯してゐたことを明かしていることと脈絡する。既にいわれているようにそこから生ずる内的煩悶が明治四十二年三月神尾安子と結婚してから一層有島の潔癖性を悩まし、靈的生活と肉の要求の狭撃にあつて耐えられない偽善的生活の深淵に陥つていったことは容易に理解出来る。入信を勧めた森本厚吉にも告げず、明治四十三年五月独立教会に退会届を送つて棄教したのも、耐えられない偽善から自己を立てなかつた真摯な純心

からであつた。そしてしばしば引用される箇所だが、

私はかうして信仰から離れてしまつたのだ。それからの私は精神的に孤独なものとなつた。三十四歳で私は元の嬰兒になつた。而してその時私は始めて自分の眼を裏返して自分といふものを見るやうになつたのだ。私が自分の眼で自分を見たのはその時が初めてだ。檻から投げだされた野獸のやうに私は何うしていか解らなかつた。私は好んで自分の尊敬する先輩から離れて立つた。

淋しいけれども、一度莫大の代償を払つて自由になつた身を他人の感化の下に置くに忍びなかつたのだ。と云つて私は自分自身を律すべき法則を見出してはゐなかつた。私の心は放埒になつた。不幸か幸か外部的な実行力の極めて薄弱な私はこれと云つて目立つた乱行はしなかつたけれども、心の混乱はひどいものだつた。妻を、愛する妻を持つ身でありながら、或る人妻に思ひを寄せるやうな乱雑な心になつてしまつてゐた。その人妻も私の顔付きから私の心を知つたに違ひなかつた。而して危い機会が屢々乱暴な私の熱意を煽つた。然し幸にして私は纒（つづ）かに踏み止まつた。私は

神も信ずる事が出来ず、人も信ずる事が出来ず、自分も信ずる事が出来なくなつた。私は何んの為めに生きるのだ。世の為に生きるのか自分の為に生きるのか、私共の生活の基調は何処にあるのか、何処に据ゑられなければならないのか、それが何うしても解らなくなつた。教室での仕事もいやになつた。

とあるように、孤独の心境の中から乱雑で、不安な生に対する自問が発せられている。瀬沼茂樹氏は『有島武郎集』（角川書店）日本

近代文学大系33「昭和四五・三・一〇」の解説で、先の『リビングストン伝』の序の引用文中にあった「愛する妻を持つ身でありながら、或る人妻に思ひを寄せるやうな乱雑な心になつた」をとりあげて、そういう錯乱が心に巣くっていた時に『老船長の幻覚』、『かん虫』が発表されたことをいい、又、『かんかん虫』に着手した当時、有島は友人の恋愛事件、といつても實際は姦通事件にまき込まれ、ピストルで脅迫されたことをあげ、コキニーの復讐は立場を変えれば有島の想像力の産物である可能性が証されると指摘し、更に『老船長の幻覚』にも通じているとみ、老船長の昔の人妻への執念も姦通への意志であつたとして、そこに「二重の心理的連関があることは、もはや疑うことができない」と有島の内的現実を解剖して創作との内的関係の密なることを明らかにしている。更に又「『かんかん虫』はこのような彼自身の心理的契機をもつて、初めて成立したものにまちがいない。だからこそ、『かんかん虫』は、彼の処女作として、後年のあらゆる可能性を内包しながら成立していることが理解される」と、この作が有島の作家的道程の中で占める重大さと意義を突いた卓見を述べている。

で、とにかくこの時期の有島は「自然」の意志から起る叛逆と、それに無縁でない性的心理に基づいた創作を始めたわけだが、一方、『二つの道』などで擱んでいゝ二元対立の世界に存在する自己を見据えており、大きく飛躍へ向けて踏み出すというよりは、思念に悩み、往々心情的には孤愁を噛む虚しさを思う人間でもあつたようだ。それはよく引用されるが明治四十三年八月九日の有島生馬宛

書簡に「我等の道は三あり、大謀叛者となるか奴隷となるか世をくらますか、即ち是れ。而して君も僕も大謀叛者たるには力未だ足らず、奴隷たるには心餘りに高く、黙して云はざるの一事を選ぶの外なかるべく候」とあることにも窺われる。言われているように「大謀叛者」は大逆事件関係者を指すものだが、黙して言わないと秘める複雑な内心には「虚」の影が感受せられる。早くから反国家、反軍国に傾き、社会主義研究会に臨みもした有島の思想上の立場からすれば、時流の暗い急迫感に沈痛の思いであつたことは疑いない。

一方、『或る女のグリンプス』を明治四十四年一月より「白樺」に断続的に発表している。これも拙稿『有島武郎覚え書(一)』(前出)で触れたが、女主人公田鶴子をして性的衝動による葛藤と自由な自然力で外在に反抗する激しい人間として描いている。へ人として最上の到達は「ヘダの外にない様だ」(『二つの道』のヘダにつらなつて田鶴子は自然の力(本能)で習俗的なものに烈しく衝突する。それが暗い時勢の動きの中であることを思うと、先の書簡で述べていた「黙して云はざるの一事」の有島の觀念は、虚構の世界に託されたと観取せねばならない。福田準之輔氏は復刊『或る女のグリンプス』(山梨英和短期大学国文学研究室、昭和四五・三・三〇)の解説で「だがこの『或る女』の基本的な構想が明治四十三年後半から同四十四年にかけて、即ち幸徳秋水事件の断罪にむかう真中にすめられ書きはじめられていることをあらためて問いなおしてみる必要がある。わが国の近代史上にみる知識人のキリスト教徒たちが棄教していく現象を安易にとらえる傾向と、同時に棄教作家のもつ思想的ゆ

らぎの意味を近代文芸史はいまいちど多面的に検討して見る必要があるようにおもふ」と適切な評を下している。既に述べたが、存在苦に不安な心情を駆り立てられながらも自然の成長観念に個の伸長が内在すると考えて衝動の醇化に賭けていた。そうした有島の意力的な姿勢からして当然圧迫する外在的要求に叛逆することは必至である。小説舞台が明治二十年代から三十年代にとられては、田鶴子の怒る激情のうち「幸徳秋水の断罪」に対する叛逆のイメーヂを重ねて探ることも失当ではない。しかし繰り返すが相対的に事象を見詰める有島の心情には、自然な意力を唯一として生きる帰一の道は容易でなかったのである。

田鶴子に激しい自然の本能力を描いた有島は、その後大正三年四月「白樺」に載せた『An Incident』では焦立と亀裂が生じた中で異邦人のように淋しい孤独を思う人間の心境を描いている。夜中にむずかる四歳の子供とそれを扱いかねている妻に焦立って主人公は自分でもどうすることも出来ない激情で——「それは自分でも癖を承知して、胸の中に棚に畳んでおくのだが、機会に乗じて激発し、そして後になってたまらない後悔に襲はれるのだ」と一方では考えているのだが——子供を外套掛けの袋戸に入れる。一瞬の満足のあと、黙って座っている妻を見て主人公の怒りは寄せ返し、子供の扱いについて小言をいうが、子供の泣き声に気をとられている妻に「苦い敵愾心」を感じる。へ出してやらなくつても宣しいでせうか」という「落着き払ったやうな、ちつとも情味の籠らないやうな」妻の態度に、「妻の眼の前で子供をつるし切りにして見せてや

りたい程荒んだ気分」になり、激情に心をゆだねる。激情が少し引くと後悔が頭をもたげ出す。へでも貴方がお入れになつて私が出してやつたのでは、私がいい子にばかりなる訳ですから」という妻の言葉に復讐的な皮肉を感じる。沈黙の中で、自分の呼吸が静まってゆくのをインスピレーションが離れてゆくような淋しい気で意識する。子供の声が胸にこたえ出した主人公は子供を袋戸から出して、子供の様子に胸をしめつけられる。妻は黙って横になっていたが、へ心の中で泣きながら口惜しがっているのが彼にはつきり感じられぬ。結局主人公は全く孤独にとり残され、憤怒の苦い後味にさいなまれてしまうのである。後悔しない心が欲しいのだがと自省し、いつも生甲斐のない自己を見出しているわけであるから、未だ相対界に悩む彷徨の領域にとどまっていることになる。つい衝動的に行動してしまふということは、その衝動とそれを抑止する自律心とが合いまつて内部で平衡のとれたものとなっていないわけだ。そのことが妻ともしっくりしない齟齬を生むことにもなっている。只管、心情の焦りとその発露に傾き、それだけに昏迷にぶつかり不如意な生を諦視することになり、孤独を深めることになっているわけである。そういう内的な状態に落ち込む一因は、矛盾対立の二元を乗り越えるへダ的な生き方なり、或はホイットマンに倣った自由人的な生き方を、自らの力にするため明確に思想化することがなされず、性急に策動していることからなのである。その限りにおいて心情発露は自然主義以前の浪漫主義とそう軒輊のあるものではない。しかしこの作品の後、『惜みなく愛は奪ふ』の素地ともなる『草の

葉（ホイットマンに関する考察）（『白樺』大正二・七）では、他者を

見習い他者を意識してきたことが、自己を偽善的にしてしまったことへの反省をし、これからは躊躇わず、偽らざるまかさずへ自分の力が能ふ限りまで進んで行くのだ。そこに私の魂がある」とまで言い切っている。又『内部生活の現象』（小樽新聞「大正三・七〜八」）の中でも、これまでは自己よりも外部のものにばかり手を触れてきたが、へ夫れは全く無益な——無益ばかりでなく、傲慢な企てであつた事」に気付いた。自己の内部、それをへ魂」と呼ぶ、そのへ魂」は私にこう告げるといつて、へ私は魂だ、私はお前の魂だ。私は肉を離れた一つの概念の幽霊ではない。又霊を離れた一つの肉の盲働の残滓でもない。お前の外部と内部との互に融け合つた一つの全体の上にお前が存在を有して居るやうに私も又全体の中で、ぎびしく働く力、総和である。（傍点菊地）というやうに霊と肉を矛盾対立するものとしてみず、むしろ霊肉二元を具えた人間の力を成長させ發揮させることが強調されている。そうなる個的な心情の発露ないし個の意志の自由を訴える自然主義以前の浪漫主義とも、又本能的な性欲に傾斜していた自然主義とも相違した、むしろそれらをのりこえて飽くまでも徹底して自己を樹立するという意図が観取出来るのである。霊と肉を包むへ魂」の主張、へ是れからお前は前後もふらずお前の魂に突貫して行かなければならない。お前の魂の泉から命を汲み、その礎の上に新しいお前を築かねばならぬ、へお前は全心全霊を挙げて、お前の魂に還つて来ねばならぬ」という訴えはのちの『惜みなく愛は奪ふ』の愛己を根本義とした一義的な意識に通

徹するものがあろう。更に又いう。

善悪邪正と云ふやうな二元的の見方で強て魂を見ようとしてはならぬ。魂の全要求、魂の全命令に謹んで耳を傾けねばならぬ。

お前が魂の全要求に応ずるなら、その時魂は甫めて生長を遂げるであらう。（中略）然し妓で私はくれぐれもお前に注意するが、

お前が今まで外面的な約束から馴致された下劣な考へ方で、魂の働きを解釈したり助成したりしてはならないといふ事だ。例へば

魂の要求の結果が、一見肉に属する欲求の遂行のやうに思はれる事があつても、夫れをお前が今まで考へて居たやうに、單純に肉

の遂行としてしまつてはならぬ。同様にその要求が一見霊に属するものゝやうに思はれる事があつても、夫れを全然肉から離して考へるといふ事は、魂の本性に背いた考へ方だ。

とした上で、へ肉と霊」について、倫理学者や宗教家は伝説的に考えて、物の二極論を表わしているとみてゐるが、それは間違つて

おり、へ二つを全然分離して考へると云ふのが極めて自然を無にした事だ」と力説して、霊肉一元の立場に立つてはじめて自由になり

得るのだという思念を所有するようになってゐる。そうなること相対界に存在するのが人間とした『二つの道』は一元化されたことにな

る。そうしてそういう思念に立たされた契機はホイットマンのローファー的精神が有島をして大胆な着想を起さしめたことによる。

前年の大正二年六月「文武会々報」に『ホイットマンの一断面』を

発表している。その中で有島はへ私の心の領土は今でも混乱の限りを尽してゐる。私の内部では正しく二つの力が対立してゐる。へし

かし私はまだ移り変わるだけの力を持ち続けている。偽善者であり偽悪者であるがとにかく自分の本真に帰りつつあることを知る。

「如何かしなければならぬ」といふ事をより強く感じ始めたからである。こんな衝動と慰藉とを感じさせてくれた事を私はホイットマンに感謝しなければならぬ」とホイットマンを切掛けにして自己が蘇生したことを認めている。有島はホイットマンの『草の葉』の「ポーモンクを出発しつ」の一節をあげて

I will effuse egotism, and show it underlying all—and I will be the bard of personality;

And I will show of male and female that either is but the equal of the other;

And sexual organs and acts / do you concentrate in me—for I am determin'd to tell you with courageous clear voice, to prove you illustrious;

And I will show that there is no imperfection in the present——and can be none in the future;

And I will show that whatever happens to anybody, it may be turn'd to beautiful results—and I will show that nothing can happen more beautiful than death;

And I will thread a thread through my poems that time and events are compact,

And that all the things of the universe are perfect miracles, each as profound as any.

(Starting from Paumanok.) (註)

私は明らかにここに予言する事が出来る。私の内部の触覚が私に告げる所によれば、ホイットマンは来るべき時代を呼び起す野の声である。ホイットマンの思想に避くべき何物もない。生活の充実した部分で彼れに触れて見給へ。彼れ位生きた膚触りを与へる詩人は又とあるまい。私は彼れの慰藉と鞭達とを愛する。慰藉と鞭達、その言葉では未だ足りない。彼れの性愛 (caress) と咒咀 (curse) 私はそれを愛する。

と結んでいるように、有島のホイットマンへの共感の濃さを表わしている。そこではエゴイズムを基層に据えた自己の「魂」の自然な発露を強調している。と同時に宇宙の脈動と人間の自然な意志とは深奥なところで係ると見る観方である。そして宇宙の奇蹟は自己の享有するものと観取していることになる。そのような自己の自然な意志を主体とした成長の観念を表現する芸術を有島は指標にかかげてゆこうということなのであろう。とすれば個性的な芸術を胎することになり「私」を描く狭いわが国の伝統的なリズムとは異なり、「魂」の自然を基調に人間性の可能性をより発展的に写す固有の文学となる。又更に、その自然への成長の意識の中には、有島が「惜みなく愛は奪ふ」でいうところの「愛己」の思想を包んでいるといふことも指摘出来よう。そしてそのような意力をホイットマンの共感の裡に有島が擱んできたことは二元対立の苦悶を超えるメルクマールを内心において着実に把えてきていることになる。

が、日常的現実では相変らず彷徨模索の域を出ていない。観念の

思索を色濃くしつた。『An Incident』の後に書かれた『幻想』

(八月「白樺」)では(或る大望を持つてゐた)主人公は(孤独の道に這入り)込んでしまったという。(それにも係らず大望は彼を捨てなかつた。彼も大望が一番大切だつた)。秋のような薄ら寒い細雨が降りそうな中で主人公は川上から川下にかけて見渡す。やがて(しつかりした歩き方で堤の上を大股に歩)いて行くと、黒ずんだ建物が麦畑の中に建っていた。(近づいて見ると屠殺場だつた)。そこに(四十恰好の女房と十二三のひよろりとした女の児)が立っていて、近づく主人公を見ている。少女のエプロンが恐ろしい程白い。互に見分けられる位になつた時、人違いに気付いたらしく二人は家に入ってしまった。主人公は(白いエプロンは然し黒いしみに成り狂つた川浪の姿が去年のまゝ残つてゐ)て(百姓の一人息子)を奪い去つたことが思い出される。(固より彼は自然とも戦ふべきものだ)と云ふ事を忘れてゐたのではない。然し彼は人間と自然とを離して考へてゐた。人間の理解から孤独となる事が自然と離縁する事にもなるとは思はなかつた。彼はその瞬間まで人間から失つた所を自然から補はせる事が出来ると思ひ込んでゐたのだと、自然と人間存在が無縁と思つてゐたことを自省する。(大望とは何だ。一つの意志だ。否彼自身だ。そんなら何んで彼は自身の前に躊躇するのだ。神か。)本流から離れた支流の土手を行くと(通行すべからずといふ制札)がある。側の百姓家の垣根に沿つて花豆が植えてあ

る。孤独を感じていたが大股でしつかり歩いている。(彼は正しく

彼の大望を励まされて)いるように思えた。(彼は其の大望の成就の爲めに牢獄に投げ入れられることを前から覚悟してゐた。牢獄生活の空想は度々彼の頭に醸された。牢獄も如何する事も出来ない孤独と、其孤独の報酬たるべき自由とが、暗く、冷たい、厚い牢獄の壁を劈いて勝手に流れ漂ふのを想像するのは、彼の一番快い夢だつた)と、闘う決意と重い桎梏の二重のイメージが揺曳している。路傍の小さい井戸を見て牢獄から運れられることを想う。(孤独の中に自分が段々慣れひたつて行く)中で(垣根の花豆と底の浅い井戸)を想い出し、(雨に濡れまざる彼は又川上の方へ向いて街道を歩き始めた)といふことなのである。その川上へ向う姿勢に大望へ向けての主人公の意志が寓されていることは文脈から考えられるが、題目『幻想』とある如く主人公の深くものを注視する思想は覗かれるもののその思想は輪廓化出来ず、詩的幻想の印象が濃く、心理の揺曳にとどまつている。この小説について瀬沼茂樹氏は『有島武郎集』(前出)の解説で「一種の自己反省を小説ふう追求する、詩的幻想を主とした思想小説であるが、不出来というのほかはない」と評している。作の出来栄は確かにぎこちなく構想と形象に熟さない感がある。だが主人公は牢獄からの飛躍を想念し、それが具体的に現実化した場合に広がる波紋の恐しさを思うと、おのずと想念は不透明になつてしまふ、そこから来る心理的な暗鬱さは読めるのである。桶谷秀昭氏は「有島武郎——作家の原風景について」(瀬沼茂樹・本多秋五編『有島武郎研究』所収、右文書院、昭和四七・一一・一〇)

の中で、「観念が、作者のナイーブな感受性がとらえた触目の光景をそこなわず、或る静謐な孤独を湛えている。有島文学の原風景がここにある、とわたしは考えるのだが、思えば、こういう風景は、明治の観念に憑かれた文学者たち、二葉亭、啄木、漱石等が一度胸中に抱いた、孤独な思索の光景なのである」と評言している。で、有島の場合は特に社会主義なりローファアの自由人ホイットマンに具体的に触れていることで、「孤独な思索」の影には自由意志が潜在している。だからその風景は複合的で、異彩を放っていることをまず押えなければならない。

とにかく対峙する二元をどう一義的に意識的に追求して文学様式の個性化を達成するか、まだ結実をみない揺蕩期であったことになる。

有島自身は大正三年秋に妻が病気に罹り、大正五年八月に妻が、その年の十二月に父武が死ぬという不幸に襲われた。

この二つの事変は私には大転機だった。何時までもいゝ加減に自分をごまかしてゐられないと思つた。私は思ひ切つて自分を主にする生活に這入るやうになつた。もう義理もへちまもない。私は私自身を一番大切にしやう、一番可愛がらう。私は私を一番優れた立派なものに仕立て上げる事に全力を尽さう、さうしつかり腹を決めてしまつた。その後の私の生活は、失敗にせよ、成功にせよ、この一念で貫かれてゐる。

と『リビングストーン伝』の序』に書いている。二人の死が自己を解放し新生への門出となつたことを表白している。が、既に触れ

て来たが『かにかん虫』『或る女のグリンプス』などの作品に有島文学の一つの核はきちんと刻まれていたことは見逃がせないのである。

(未完)

註 英詩は杉本喬、鍋島能弘、酒本雅之の共訳『草の葉』(岩波文庫)による。

自己中心の思想を広めそれが万物の基礎であることを明示して、ぼくは個性を歌う詩人になろう、

それから男性と女性についてはどちらもお互に寸分違はず平等であることを教えよう、

それから性器と性の行為よ、ぼくの歌の中にどんどん入ってくるがい、君たちの素晴しさを証明してみせるため、勇氣に溢れた一点の曇りもない声で君たちのことを語ろうとぼくは決意を固めている、

それから現在に不完全なことなど少しもなく、未来にだつてありえないことをぼくは示そう、

それからたとい誰に何が起ろうともやがてみごとに結果に変わるのだというのを、

それから死よりも美しいことは何ひとつ起こりえないことを、

それからぼくの詩群をひとすじの糸で縫い合せて、時代と事件とが緊密にかかわり合っていることを、

それから宇宙に起こるとんなことでもすべて完全な奇蹟であり、ひとつひとつがいずれ劣らぬ深味をそなえていることを、ぼくははっきりと示してやろう。